九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

Doubt にかかわる構文の歴史的変化について（2）：Early Modern English Prose Selections の分析から

家入，葉子
九州大学人文科学府

https://doi.org/10.15017/24665

出版情報：九大英文学. 54, pp.119-134, 2012-03-31. 九州大学大学院英語学・英文学研究会
バージョン：
権利関係：

Doubt にかかわる構文の歴史的変化について（2）
——Early Modern English Prose Selections の分析から [1]

家入　葉子

1.　序

小論は、本誌 50 号に掲載された拙論「Doubt にかかわる構文の歴史的変化について——*The Oxford English Dictionary* の引用文データの分析から」の続編である。[2] 正編である家入 (2008) では、*The Oxford English Dictionary*（以下、*OED* ）の引用文データを利用して動詞 doubt の史的発達を概観した。小論では、Early Modern English Prose Selections（以下、EMEPS）の B-texts（約 400 万語）を調査し、動詞 doubt の史的発達を方向付ける重要な時期である 16・17 世紀を、さらに詳細に分析する。また、EMEPS との比較により、*OED* の例文データをコーパスとして言語調査に利用することの有効性についても議論する。

2.　Early English Prose Selections (EMEPS)

EMEPS は、Early English Books Online [3] のテキストデータの一部をダウンロードして集積する形で、著者自身が言語分析のために作成したコーパスである。著作権の関係で、一般に公開することはできないが、コーパスの詳細を述べておきたい。以下の表が示すように、合計約 800 万語からなり、大きく A-texts と B-texts に分かれている。さらに、それぞれが 1501 年〜1550 年、1551 年〜1600 年、1601 年〜1650 年、1651 年〜1700 年の 4 期にまとめられており、初期近代英語期を通時的な視点から分析することが可能になっている。一方、詳細なジャンル分けは行っていないので、社会言語学的な分析には、やや不向きである。特定のジャンルに偏らないように工夫しながらテキストを集積したものの、時代背景を反映して、宗教に関するテキストが多めに含まれる傾向がある。

表 1.　EMEPS の構成

A-texts

Files	Dates	Number of texts	Approximate size
A16th-1	1501-1550	43	1,007,800 words
A16th-2	1551-1600	53	1,002,400 words
A17th-1	1601-1650	95	1,002,200 words
A17th-2	1650-1700	75	1,001,200 words

B-texts

Files	Dates	Number of texts	Approximate size
B16th-1	1501-1550	39	1,009,600 words
B16th-2	1551-1600	34	1,003,300 words
B17th-1	1601-1650	39	1,004,600 words
B17th-2	1650-1700	43	1,007,400 words

（Iyeiri 2011: 136 より）

動詞の doubt は、内容語の中では比較的頻度が高い語彙であるので、小論では、EMEPS の B-texts のみを使用し、約 400 万語を分析の対象とする。また、必要に応じて B16th-1 と B16th-2、B17th-1 と B17th-2 をまとめ、16 世紀、17 世紀という分析の方法を取る。

3．動詞 doubt に節が続く場合

動詞 doubt の構文で議論の中心となるのは、従属節が続く構文である。現代英語の語法書によれば、doubt に続く従属節は、doubt が肯定文で起こるか否定文で起こるかによって性質が異なり、肯定文では whether 節が一般的であるが that 節も起こるとされる。一方、否定文では逆に that 節が一般的であり、否定疑問文では whether 節も起こるとされる（Dixon 1991: 216; Burchfield 1998: 229; 他）。[4] このように肯定文の doubt では whether 節が、否定文の doubt では that 節が安定的に起こることは、史的データにおいても確認できるが、家入（2008）ではさらに以下の点を指摘した。（1）肯定文の doubt に続く従属節は多様で、whether 節、that 節（省略を含む）の他に、but 節、lest 節も起こる、（2）whether 節は安定的に起こるが、19 世紀・20 世紀ではこれにかわる if 節の伸びにも注目すべきである、（3）Burchfield (1998: 229) は肯定文の doubt に続く that 節は 19 世紀の最後の四半世紀ごろから増加傾向にあるとし

ているが、史的データを見る限り、古くから比較的頻繁に観察される、(4) 数は少ないが、who などの疑問詞に導かれる節（Huddleston & Pullum 2002: 983 が open class と呼ぶもの）が肯定文と否定文の doubt のあとに起こる、(5) 否定文の doubt の場合は that 節が安定的に起こるが、16 世紀〜18 世紀は but 節の頻度の方が高い。

辞書データをコーパスとして利用する際の懸念の一つとしてしばしば表明されるのが、頻度の問題である。すなわち辞書データをもとにして明らかになった相対頻度が言語の実態を正しく反映しているか、という点である。*OED* のような実際の文献の中から例文データを集積している辞書の場合、理論的には文献に現れない構文が辞書データに入る可能性はなく、また文献において稀な構文は辞書データとして採用される可能性も低くなるので、データが膨大であるという条件下では、辞書データの相対頻度の信頼性はある程度高いと考えられる。今回の EMEPS の調査においても、上記の (1), (3), (4), (5) をおおむね裏付ける結果が得られた。（ただし、(2) は、19 世紀・20 世紀の発達であるので、EMEPS では証明できない。）表 2 は、EMEPS における肯定文と否定文の doubt のあとにどのような節が続くかを示したものである。

表 2． EMEPS における動詞 doubt とそれに続く節

	肯定文の doubt の場合		否定文の doubt の場合	
	16 世紀	17 世紀	16 世紀	17 世紀
that-clauses	10	5	7	3
(*that*)-clauses*	1	5	17	9
but-clauses	1	0	56	18
but that-clauses	3	1	28	4
lest -clauses	0	3	0	0
whether-clauses	22	6	0	0
if-clauses	0	1	0	0
open class	5	0	15	0
計	42	21	123	34

*(*that*)-clauses は、接続詞の that が現れない場合を示す。なお、I doubt および I doubt not のような表現が挿入的に文中に起こる場合を含んでいる。

表 2 により、肯定文の doubt では that 節と whether 節が主流であることがわか

る。また、that 節は 16 世紀・17 世紀でも確立した構文であり、決して近年の発達とはいえないようである。17 世紀になると接続詞の that が表記されない例が増加するが、この点については、第 5 節で議論する。以下に、that 節と whether 節の例をあげる。

(1) For he doubted much that the SYRACVSANS and their friends would neuer suffer him to respite those other, if they once vnderstood it. (1602 Cornelius Nepos) [5]

(2) For moche and longe I haue doubted with my selfe, whether hit shulde pertayne vnto me, other by worde or by writyng, to touche any suche matters of weyght and grauyte. (1536 Thomas Starkey)

また、肯定文の doubt に続く従属節の種類が多様であることも、表 2 から明らかである。that 節、whether 節の他、後に whether 節と競合しながら拡大する if 節の例も 1 例観察できる。さらに、本来は否定文の doubt に特徴的な but 節（および but that 節）も例は少ないながら起こり、その他にも lest 節やいわゆる open class の例も見られる。ただし、but は肯定の疑問文であることが多い。一方、lest 節は家入（2008）においても肯定文の doubt のみに観察されたが、絶対頻度が少ないために偶然の要素を排除できずにいた。今回の調査でも肯定文の doubt のみに観察できることから、その生起環境に肯定であることという条件が関係している可能性が高いといえよう。[6] 以下に、肯定文の doubt が that 節、whether 節以外の節を従える例をあげる。

(3) Nowe who doubteth, but they that be fleumatike may beste abyde hunger, seinge they haue more moysture than theym nedeth. (1536 Ulrichvon Hutten)

(4) This losse draue Dionysius into such a feare, doubting besides lest Mago following his victorie should draw towards SYRACVSA, which was easie to be wonne hauing no garrison in it (1602 Cornelius Nepos)

(5) it may well be doubted if they have bin any Parliament during this Session

(1643 Thomas Bilson) [7]

(6)　As if any man could doubt to whom he wrote …　(1588 George Wither)

(3) は but の例で、肯定の疑問文になっている。(4) は lest 例、(5) は if の例、そして (6) が open class の例である。

否定の doubt の場合も *OED* の例文データの調査と同様で、that 節と but 節（but that 節を含む）が中心的な構文であることがわかる。that 節よりも but 節の頻度の方が高いのも、初期近代英語の特徴をよく表しているといえるだろう（López-Couso & Méndez-Naya 1998 を参照）。以下に、否定文の doubt に続く that 節と but 節の例を示す。

(7)　but only that hee doubteth not that Christ went to Hell　(1592 Adam Hill)

(8)　I doubt not, but they haue moche desyred, some suche occasyon, to testyfye their hartes and fydelytie, to the kynges hyghnes.　(1539 Sir Richard Morison)

家入（2008）の *OED* の調査に比べて、EMEPS では but 節の頻度がさらに高い傾向が見られる。[8] 否定含意語とともに起こる but は、中英語の that 節内にいわゆる expletive negation（意味的に不要な否定語が置かれる現象）が起こる構文にかわって、初期近代英語期に広く観察されることが分かっている（Warner 1982: 222-223 参照）。[9] ここでは doubt の後の that 節にかわる but 節を取り上げたが、次節で扱う不定詞構文とともに but が起こることもあり、また名詞の no doubt の後に but が起こることもある。[10]

このように否定文の doubt では、肯定の場合に比べて構文の多様性がやや限られているが、今日では使われない構文として、肯定文の doubt と同様に、who や what などの疑問詞に導かれた open class の例が観察できる点にも注目したい。open class の例は *OED* の調査では、15 世紀から 20 世紀にかけて観察された（家入 2008: 319-329 を参照）が、頻度が低く、その傾向を掴むことが容易ではなかった。EMEPS の調査では、肯定文の doubt、否定文の doubt

の双方で 16 世紀に限られている。したがって、全体としては初期近代英語期以降、徐々に衰退に向かった構文であると考えることができよう。また、open class の例については、積極的に「疑う」というよりも、*OED* の定義の最初にある‘to be in uncertainty’の意味（s.v. *doubt* ）で解釈すれば、現代の感覚でも無理なく理解できよう。

本節の最後に、*OED* の例文データの分析では必ずしも明らかにできなかった点にも言及しておきたい。上述のように、特定の時代に存在しない構文が *OED* の例文となる可能性はなく、当該の時代に頻度が高い構文は例文として採用される確率が高くなるので、構文間の相対的な頻度は、*OED* の例文データにある程度正しく反映されている可能性が高い。しかしながら、文体的な特徴の中には構文とは違って時代の影響を受けにくいものもあり、このような場合には言語実態を正しく反映していない可能性も皆無ではない。[11] EMEPS を調査した表 2 についていえば、肯定文の doubt に比べて否定文の doubt の頻度が明らかに高い傾向があることがわかる。すなわち、doubt はその使用環境について、明らかに否定的な極性を持っているといってよいだろう。[12] いいかえると、‘uncertainty’を表す doubt は、実際には否定のコンテクストで‘certainty’を表すために使用されることが多いということになる。これが *OED* のデータに反映されていない背景には、例文を選ぶ際に、肯定文が選択されやすいということがあるのかもしれない。

4. 不定詞構文の発達と衰退

上述のように、動詞 doubt は現代英語では that 節、whether 節、if 節を従えるが、歴史的には but や lest なども加わり、さらに多様性に富んだ構文が観察できる。この多様性は、節以外の構文が可能であることについてもいえるようで、EMEPS では、以下の例が示すような不定詞構文も比較的頻繁に起こる。

(9) wherin I dout not to pronounce, that they be euyll iudged, and that they whiche so iudge, haue conceyued of them a corrupte iudgement. (1536 Thomas Starkey)

(10)　that they could not, or did doubt themselues not to be able to resist, neither the one nor the other　(1591 William Garrard)

(11)　as no man doubteth sinne to be the euill desert of man　(1586 Robert Crowley)

(9) は、doubt のあとに不定詞が直接続く例、(10) は不定詞の前に再帰代名詞を取る例、そして (11) は不定詞の前に主語とは異なる目的語を取る例となっている。*OED* は (9) のような例に対して ‘hesitate’ という意味を当てているが、構文ごとに異なる意味を与えるよりも、doubt が表す ‘uncertainty’ の意味を使うことで十分に解釈が可能であろう。なお 1 例ではあるが、EMEPS では (12) のように原形不定詞が続く構文も起こる。

(12)　& doubt not doe espy your poysoned doctrine, which lay hid from them, vnder your darke speach, and vnaccostomed phrases　(1579 John Rogers)

また EMEPS の不定詞構文では、不定詞の前に but が生じる例が多いのも特徴的である。否定文の doubt に限定的ではあるが、16 世紀では該当する 28 例のうち 3 例が、17 世紀では該当する 14 例のうち 7 例が but とともに起こる。以下は、その具体例である。

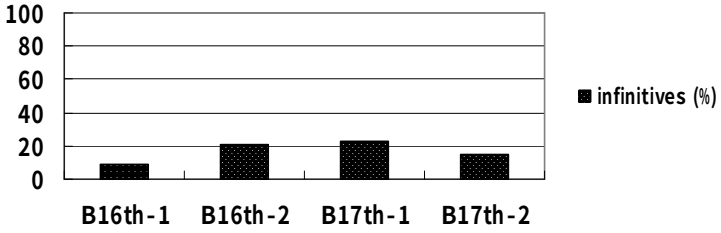
(13)　I doubt not but to satisfie the Reader in a particular Chapter on that Subject. (1687 Henry Care)

(14)　I doubt not but to make appear, when I come to it　(1691 Benjami Keachn)

上に述べたように、否定を含意する語のあとに生じる but は特に初期近代英語期に拡大したと言われているが、接続詞としての but のみならず、不定詞構文とともに起こる but にも同様の傾向が見られることは注目に値する。

以上のような doubt の不定詞構文は、*OED* では少数の例とともに言及されているが、現在では基本的に使用されなくなっている（s.v. *doubt* ）。現代英語の語法書でも、著者の知る限りにおいては、不定詞構文への言及はない。

また Dirven (1989: 131) は、現代英語では verbs of cognition のあとでは that 節が起こるとし、否定の場合の doubt を confirm、imply、realize、recognize、think、understand など多数の動詞とともに、that 節のみを取り、不定詞は取ることができない動詞の中にあげている。しかしながら、doubt とともに起こる不定詞構文が初期近代英語期に比較的頻繁に生じたことは間違いないようである。家入 (2008) の *OED* の例文データの調査でも 27 例の不定詞構文が観察され、そのうちの 20 例が 16 世紀と 17 世紀に集中している。EMEPS の調査でも合計 45 例の不定詞構文が起こる。そのうちの 42 例が否定文の doubt とともに起こっているので、少なくとも否定文の doubt においては、無視することのできない重要な構文であることがわかる。以下のグラフでは、頻度の推移をさらに詳しく分析するために、EMEPS の本来のファイル区分に従って、16 世紀前半 (B16th-1)、16 世紀後半 (B16th-2)、17 世紀前半 (B17th-1)、17 世紀後半 (B17th-2) について、否定の doubt が節、不定詞、動名詞[13]のいずれかを取る場合の総計に対する不定詞の割合を示した。



グラフ１． 否定文の doubt が不定詞構文を取る割合（節、不定詞、動名詞を取る例全体における割合）(%) (EMEPS)

一番頻度が低い 16 世紀前半でも全体の 10 パーセント近くが不定詞構文であることにも注目する必要があるが、16 世紀後半、17 世紀前半において、不定詞構文が 20 パーセントを超えている点はさらに注目に値する。不定詞構文は動詞 doubt の構文として最終的には確立しなかったものの、初期近代英語期においては、無視することのできな重要な構文であった可能性が高い。

このような初期近代英語期における不定詞構文の拡大とその後の衰退は、

英語のさまざまな動詞に起こった当時の変化に合致するものである。Manabe (1979: 4-5) は、英語史を通じて不定詞や動名詞が that 節にかわる形で増加していく傾向が見られることに言及し、前者が that 節を凌駕するのが 16 世紀であるとする。また、Iyeiri (2010) は、Rohdenburg (2006: 159-160) の Great Complement Shift という用語を借りながら、動詞の complement に起こった節構造から不定詞構造への変化を First Complement Shift と呼んでおり、この変化が初期近代英語期に集中して起こる傾向があることを指摘している。現代英語でも不定詞を従える動詞の場合は、この時期の不定詞構文の拡張が基盤になっている場合が多いが、一方で、現代英語では再び節構造を取るようになった動詞もあり、これらの動詞では、この時期に拡大した不定詞構文が再び衰退することになる。動詞 doubt は、不定詞の拡大のあと衰退を経験するタイプの動詞で、グラフ 1 を見ると、すでにその衰退傾向が 17 世紀には表れていることがわかる。[14]

5．談話機能の発達

動詞の doubt は、Biber が stance と呼ぶ「話者の命題に対する態度」にも関係している（Biber 2004: 107; 他、参照）。話者の stance を表すには法助動詞を用いる方法、法副詞を用いる方法、などさまざまな可能性があるが、think や know などのいわゆる mental verbs を用いる方法もあり、Nathaniel Bacon (-1622) の書簡を分析した Palander-Collin & Nevala (2011: 110) は、Bacon が stance を表すために使う典型的な動詞の一つとして doubt をあげている。本節では、動詞 doubt を談話機能の観点から分析してみたい。

Thompson & Mulac (1991: 313) は、(15) の例をあげながら、cognitive verb の談話機能が高まるにつれて「主語＋動詞」のセットが文から遊離し、文中での位置を変えていくことに言及している。

(15) a. I think *that* we're definitely moving towards being more technological.
b. I think *0* exercise is really beneficial, to anybody.
c. It's just your point of view you know what you like to do in your spare time *I think.*

(15) を例にとれば、a よりも b、b よりも c で談話機能が高まり、文のトピックが従属節の主語に移行する傾向が強まるとともに、I think がより epistemic な性質を帯びることになる。動詞 doubt についてもこの傾向は明らかで、家入 (2008) の *OED* の調査では、初期近代英語期になると接続詞の that が表記されない方が表記される場合より多くなることがわかっている。肯定文の doubt では、that 節が表記されない例が表記される例を上回るのは 17 世紀になってからであり、I doubt の epistemic parenthetical としての発達はその後も継続する (pp. 325-328)。一方、否定文の doubt では、やはり *OED* の調査により、少し早目の 16 世紀に that を表記しない例が表記する例を上回るものの、19 世紀以降、再び that 節を表記する例が増加し、この流れが止まる可能性が示唆されている (pp. 331-334)。

EMEPS が扱う時代は、ちょうど doubt の談話機能が拡大する時期にあたり、実際に以下の例文が示すように、doubt の後に that が表出しない従属節が続く文や、I doubt および I doubt not が文中での位置を変える例を観察することができる。[15]

(16) and I doubt there is some practice of it (1672 Thomas Hackett)

(17) and then I dout not they will more auayunce godes gospell, then we, and better kepe the word of god in honor with out false gloses then we. (1547 John Hooper)

(18) But you Gentlemen, I doubt not are willing to Distinguish between Truth and Error (1700 Robert Calef)

以下の表は、接続詞 that の有無を示したものである。

表 3. EMEPS における動詞 doubt と接続詞 that の有無 [16]

	肯定文の doubt の場合		否定文の doubt の場合	
	16 世紀	17 世紀	16 世紀	17 世紀
that あり	10	5	7	3
that なし	1	5	17	9
計	11	10	24	12

表 3 より、肯定文の doubt では、16 世紀から 17 世紀にかけて大きな変化が起こることがわかる。16 世紀では 1 例をのぞいて that が表記されているが、17 世紀になると that がない例が増加している。否定文の doubt については、表を見る限り that の脱落がより進んでいるように見えるが、ここに数えられている例の他に大量の but 節が存在するので、さらなる調査が必要であり、結論を急ぐことはむずかしい。

以上、談話機能の高まりとの関係で接続詞 that の有無を見てきたが、その他にも一人称単数主語の I の位置づけを見ることも可能である。I doubt や I doubt not が文副詞のような発達を遂げながら談話機能を高めていく過程は、現在時制の用法と主語の I との関係性が高まっていく過程でもある。以下の表では、現在時制で使用されている doubt の総数における一人称単数主語、すなわち I の割合を示したものである。

表 4． EMEPS における動詞 doubt と一人称単数主語 (I) の割合

	肯定文の doubt の場合		否定文の doubt の場合	
	16 世紀	17 世紀	16 世紀	17 世紀
現在時制の場合	22.2%	62.5%	65.2%	58.0%
それ以外の場合 [17]	8.5%	7.7%	15.4%	22.2%

表 4 より、現在時制の doubt と一人称単数主語、すなわち I との結びつきが極めて強いことが明らかである。肯定文の doubt の場合には、これが時代とともに進んでいく様子が明らかで、16 世紀 (22.2%) から 17 世紀 (62.5%) にかけて両者の結びつきは急速に強化される。一方、否定文の doubt の場合には、すでに 16 世紀から doubt の談話機能が高いようにも見える（すでに 16 世紀の時点で 65.2% となっている）。I doubt not は、I doubt に比べて意味的に I think などの他の cognitive verbs に近い位置にあるので、否定の doubt の方で談話機能の拡大が早いということもあり得るだろう。

また、否定文の doubt のところを見ると、17 世紀には談話機能の高まりにかげりが見えるようにも見える（16 世紀の 65.2%が 17 世紀には 58.0%に減少）。時代は少しずれるが、家入 (2008) の *OED* の例文データの調査でも、19 世紀を迎えるころには接続詞 that がむしろ表記されるのが普通になり、doubt の

epistemic parenthetical の用法が収縮することが明らかになった。家入 (2008) では、I doubt not には、no doubt などの競争相手が存在したことを要因の一つとしてあげたが、その他にも I doubt not には競争相手が多い。British National Corpus を用いて現代英語を調査した鈴木 (2011) は、no doubt と類似の意味を表す表現として、doubtless と undoubtedly の分析を行っている。[18] EMEPS でも、no doubt、doubtless、undoubtedly の頻度は高く、その他にも without doubt や undoubtedly の異形としての undoubtly や undoubted（-ly 語尾がつかないが副詞として使用されているもの）も観察できる。これらの語を合計すると、16 世紀では 314 例、17 世紀では 267 例にもなり、否定文で使用された doubt の総数をいずれも上回っている。否定文における doubt の EMEPS 以降の発達については、これらの競合する表現との関係を見ることも重要になろう。また動詞そのものの発達では、EMEPS 以降の時代においては、助動詞 do の発達を考慮に入れる必要がある。EMEPS でも I do not doubt のように助動詞 do を使用する構文が少しずつ浸透してきているが、[19] その本格的な発達は、これからである。I doubt not が I do not doubt に変わっていくという英語史上の変化が、談話機能を強化した I doubt not の継続的な発達をさまたげた可能性は十分にあるといえる。なぜなら、I doubt not が文副詞のような機能を帯びるようになる過程は、決まった表現として確立していく過程でもあり、do の導入によって形態そのものに変化が起こるとすれば、それはこの過程を妨げるものに他ならないからである。

6．結語

以上、動詞 doubt の構文の発達を、特に 16 世紀・17 世紀に焦点を当てながら分析してきた。doubt は、史的データにおいても現代英語と同様で、節を従えることが多い。そしてその節の種類は多様で、特に肯定文の doubt のあとでは、一般的であると考えられている whether 節やそれにかわる if 節の他にも、that 節、but 節、lest 節が起こり、また who などの open class の構文も可能である。否定文では、but 節と that 節に集中する傾向があるが、open class の構文はやはり観察できる。ただし、open class は、すでに 17 世紀には衰退

傾向を示している。一方、doubt のあとに but を使用する構文は、EMEPS では非常に頻度が高く、初期近代英語期の傾向をよく表しているということができる。ちなみに、but は不定詞構文や no doubt などの名詞の doubt のあとでも起こるのが特徴的である。

また今回の調査では、doubt の不定詞構文の頻度が比較的高いことも明らかになった。不定詞構文は一時期に散発的に見られた構文として、これまであまり注目されることがなかったが、16 世紀・17 世紀には 20% 以上の頻度で起こることもあり、無視することはむずかしい。また、Great Complement Shift の枠組みで考えると、that 節と競合する構文として、一時期的に重要な発達過程をたどったものと推測することができる。

動詞 doubt の談話機能については、16 世紀から 17 世紀が比較的安定した時代であることもあり、否定文についての議論にはむずかしさも残る。しかしながら、肯定文の doubt については、明らかにこの時期に談話機能の拡大が起こっていることを観察することができた。初期近代英語期以降の発達については、no doubt、doubtless、 undoubtedly、without doubt、undoubted など、競合する表現との関係も視野にいれながら、また助動詞 do の発達も考慮しながら、さらなる調査が必要であろう。

最後に、*OED* の例文データをコーパスとして使用した家入 (2008) との関係を見てみたい。今回の調査では、*OED* の例文データによって明らかになった事実を、おおむね再確認し、さらに doubt の発達において鍵となる 16 世紀・17 世紀を詳細に分析することができたといえる。*OED* の例文データを言語分析に使用することが有効であるとすれば、おそらくその量の多さが関係している可能性が高い。一方で、今回の調査では、動詞の doubt が否定の環境で起こる傾向が極めて強いなど、*OED* のデータでは把握しにくい点も、明らかになった。*OED* の例文データは、時代とともに変化する構文や意味などを分析するのには適しているが、いつの時代にも存在する肯定文と否定文の比率などを扱うのには、あまり有効ではない可能性も、コーパスとして使用する際には考慮する必要があるだろう。

注

1. 本研究は、科学研究費（基盤研究 C）の助成を受けたものである。
2. 本誌 50 号に掲載された「Doubt にかかわる構文の歴史的変化について——*The Oxford English Dictionary* の引用文データの分析から」を英語の論考として発展させたものが Iyeiri (2009) である。Iyeiri (2009) における日本語版の書誌情報の記載もれは、John Benjamins 社と交渉の上、正式に修正済み。eBook ではすでに修正版が入手可となっており、印刷版では次版から反映される予定である。ただし両論考の内容は、否定含意動詞（e.g. forbid, prohibit, hinder, doubt, fear）全般を扱った著書である Iyeiri (2010) の中に改訂・統合されているので、動詞 doubt についての最新の議論としては、Iyeiri (2010) を参照されたい。
3. Early English Books Online については、<http://eebo.chadwyck.com/home> を参照（最終アクセス　2011 年 12 月 20 日）。
4. ただし、Austin (2009: 100) は doubt に続く whether 節がそれほど多くないことに言及し、“It seems that genuine uses with *whether* are hard to find and this is surprising considering that H. W. Fowler’s *Modern English Usage* advocated *whether* as the only correct form unless the sentence is negative” と述べている。Fowler (1926: 121) 参照。
5. 16 世紀・17 世紀の著書は、タイトルが極めて長い傾向がある。紙幅の関係で、小論の引用では著者名と年代のみを記すこととする。詳細は Iyeiri (2011) の EMEPS を構成する文献のリスト (pp. 146-199) を参照されたい。
6. ちなみに Iyeiri (2010: 135) では、動詞 fear の構文についての調査も行われており、ここでも lest に導かれた節のほとんどが肯定文に起こることが指摘されている。
7. 動詞 doubt が受動態で起こる例も、doubt の complement として節が生起する限り、表 2 に含まれている。ただし、例はそれほど多くない。
8. ただし but 節の中には、いわゆる逆接の but 節と区別がつきにくいものも少なくない。明らかに逆接の but 節であるものは、例文を確認しながら排除した。
9. この構文の起源としてラテン語の quin の影響が指摘されることも多いが、Helsinki Corpus を調査した López-Couso & Méndez-Naya (1998) は、ラテン語からの翻訳文献でも quin の箇所に対応しているとは限らず、必ずしもラテン語からの翻訳に but が多いという結果は得られなかったと結論づけている。
10. 以下に、名詞の no doubt のあとに起こる but 節の例をあげる。 and no doubt but the imbracing therof with thankfulnes for the same, God may and will cause it againe to multiply (1590 Edward Jeninges).
11. *OED* の例文データは、ジャンルの違いにかかわる分析にも不向きである。例文が文学作品からのものに偏っていることは、しばしば指摘されるとおりである（Schäfer 1980: 13）。
12. Tottie (1981: 271; 1982) は、現代英語の話し言葉では書き言葉の 2 倍ほどの頻度で否定文が起こることを指摘している。このような頻度の違いの分析にも、*OED* のような辞書の例文データは不向きである。

13. 動詞 doubt が動名詞を取る例は歴史的にも頻度が低く、今回の調査では 17 世紀の以下の例のみが該当する。… you need not doubt accomplishing you Lawful desires (1676 Moses Cook).
14. Iyeiri (2010) が取りあげた動詞の中では、現在まで不定詞構文が維持されている典型的なものは forbid (pp. 28-42) である。中には、一旦不定詞構文を拡大させたあと動名詞構文に推移していく動詞もあり、prohibit などがこれにあたる (pp. 80-87)。この不定詞構文から動名詞構文への推移を Iyeiri (2010) は、Second Complement Shift と呼んでおり、Rohdenburg の Great Complement Shift が大きく二つの推移から構成されていることを示している。
15. 文全体を修飾する epistemic parenthetical の発達との関係で、Thompson & Mulac (1991) のような推論の他に、as I think のような表現を考慮に入れるべきであるという議論もある (e.g. Brinton 1996: 249-253)。Bromhead (2009: 193) でも、初期近代英語期に as I think や as methinks などの表現が観察できることが指摘されている。しかしながら EMEPS では、as I doubt not などの数が極めて限られていたので、小論では議論の中心を Thompson & Mulac の枠組みに置いた。
16. ここでは、人称や時制に関係なく、すべての該当例を含めている。
17. 「それ以外の場合」は、現在時制という条件に当てはまらない全ての例を含む。したがって、過去形などの他の時制のもの、動詞 doubt が分詞の形になっているもの、などを含んでいる。
18. ただし、鈴木 (2011) の関心は、この 3 つの表現の微妙の意味上の差異にある。
19. 助動詞 do を使用する構文そのものは、次の例のように、少数ながら観察できる。… nor do I doubt your Father might first apply himself to others; … (1700 Robert Calef).

参考文献

Austin, F. 2009. “Points of Modern English Usage LXXXV”. *English Studies* 90: 100-111.

Biber, D. 2004. “Historical Patterns for the Grammatical Marking of Stance: A Cross-register Comparison”. *Journal of Historical Pragmatics* 5(1): 107-136.

Brinton, L. J. 1996. *Pragmatic Markers in English: Grammaticalization and Discourse Functions*. Berlin: Mouton de Gruyter.

Bromhead, H. 2009. *The Reign of Truth and Faith: Epistemic Expressions in 16th and 17th Century English*. Berlin: Mouton de Gruyter.

Burchfield, R. W. 1998. *The New Fowler’s Modern English Usage*. Rev. 3rd edition. Oxford: Clarendon Press.

Dirven, R. 1989. “A Cognitive Perspective on Complementation”, in *Sentential Complementation and the Lexicon: Studies in Honour of Wim de Geest*, ed. D. Jaspers, et al., pp. 113-139 Dordrecht: Foris.

Dixon, R. M. W. 1991. *A New Approach to English Grammar, on Semantic Principles*. Oxford:

Clarendon Press.
Fowler, H. W. 1926. *A Dictionary of Modern English Usage*. Oxford: Clarendon Press.
Huddleston, R. & G. K. Pullum. 2002. *The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge: Cambridge University Press.
Iyeiri, Y. 2009. "The Historical Development of the Verb *doubt* and its Various Patterns of Complementation", in *Exploring the Lexis-Grammar Interface*, ed. U. Römer & R. Schulze, pp. 153-169. Amsterdam: John Benjamins.
Iyeiri, Y. 2010. *Verbs of Implicit Negation and their Complements in the History of English*. Amsterdam: John Benjamins; Tokyo: Yushodo Press.
Iyeiri, Y. 2011. "Early Modern English Prose Selections: Directions in Historical Corpus Linguistics". *Memoirs of the Faculty of Letters, Kyoto University* 50: 133-199.
López-Couso, M. J. & B. Méndez-Naya. 1998. "On Minor Declarative Complementizers in the History of English: The Case of but", in *Advances in English Historical Linguistics (1996)*, ed. J. Fisiak & M. Krygier, 161-171. Berlin: Mouton de Gruyter.
Manabe, K. 1979. *Syntax and Style in Early English: Finite and Non-finite Clauses c900-1600*. Tokyo: Kaibunsha.
Palander-Collin, M. & Nevala, M. 2011. "Sociopragmatic Aspects of Person Reference in Nathaniel Bacon's Letters", in *Communicating Early English Manuscripts*, ed. P. Pahta & A. H. Jucker, pp. 102-117. Cambridge: CUP.
Rohdenburg, G. 2006. "The Role of Functional Constraints in the Evolution of the English Complementation System", in *Syntax, Style and Grammatical Norms: English from 1500–2000*, ed. C. Dalton-Puffer, D. Kastovsky, N. Ritt, & H. Schendl, pp. 143–166. Bern: Peter Lang.
Schäfer, J. 1980. *Documentation in the O.E.D.: Shakespeare and Nashe as Test Cases*. Oxford: Clarendon Press.
Thompson, S. A. & A. Mulac. 1991. "A Quantitative Perspective on the Grammaticalization of Epistemic Parentheticals in English", in *Approaches to Grammaticalization, II: Focus on Types of Grammatical Markers*, ed. E. C. Traugott & B. Heine, 313-29. Amsterdam: John Benjamins.
Tottie, G. 1981. "Negation and Discourse Strategy in Spoken and Written English", in *Variation Omnibus*, ed. D. Sankoff & E. H. Cedergren, pp. 271-284. Carbondale: Linguistic Research.
Tottie, G. 1982. "Where Do Negative Sentences Come From?". *Studia Linguistica* 36: 88-105.
Warner, A. 1982. *Complementation in Middle English and the Methodology of Historical Syntax: A Study of the Wyclifite Sermons*. London: Croom Helm.
家入葉子. 2008. 「Doubt にかかわる構文の歴史的変化について――*The Oxford English Dictionary* の引用文データの分析から」『九大英文学』50: 317-338.
鈴木大介. 2011.「法副詞 no doubt の機能について――類似表現との比較から――」『英語コーパス研究』18: 17-31.